

## 1 タイ初の国際！大会

## First International Regatta

12月11日、バンコクに到着後、私もレースに組み込まれているとの連絡があり驚く。記念すべき第1回大会には、ホンコン、マレーシア、シンガポールに加え、在タイの英国・ドイツ・アメリカの人も参加。総勢で約20人程度だろうか。一応国際大会である。種目は1×2×で、距離500m(よかつた)。在タイ中の慶応OB、Nさんも参加させられていた。

レースは、恒例のドラゴンボート大会の併催で、3日かけて行われる。チャオプラヤー川を南に下ったタイ最大のラマ区世橋の下で、観光地もないので観光客はおらず、地元の人ばかりだ。初日午前は、開会式で、タイ海軍や沿岸警備隊の救助作業の実演などが華やかに繰り広げられた。ラマ区橋の下をヘリコプターや消防飛行艇がぐぐっていった。圧巻！

ドラゴンボートはさすがに真剣で、気合いが入って迫力がある。ローイングとは趣は異なるが、この雰囲気はとても好きだ。一番大きなドラゴンボートは、55人漕ぎで、なんともすごい。



## 2 初日

## Exhibition

ローイングの方はなかなか予定通りにいかない。引き潮で流れがはやく、スタートに艇がそろわないようだ。艇の状態も良くない。結局、初日のレースは、予選からエキシビションに変更された。私はホンコン、シンガポールの選手と対戦。ホンコンに続いて2着だった。ラフコンは私には幸いだった。久しぶりだったが、まっすぐ進んだし、結構うまく漕げたと自己満足。爽快。チャオプラヤーは大河で、流量と潮汐で流れはかなり速く、また大きな船も通るのでその波もありコンディションはよくない。タイの漕艇関係者もやや気にしている様子。「私の漕いでいる太田川では、時々これよりひどい流れと波のときもありますよ。マイペンライ。」という、とてもうれしそうだった。(補足: 普段の練習は、数km下流のネイビーアカデミー沖だった。また98年アジア大会は、別の貯水池で開催された。)



## 3 艇の修理

## Repair

当時、タイにはまだ艇が不足し、海外から貰い受けた中古艇ばかりで、2×2艇と1×5艇が会場にきていたが、どれも状態が悪かった。使い古された中古艇の上、整備経験者もいなかったので、2×などは硬いプラスチック板が張られ、それが割れて浸水しほうだいの状態だった。初日のレース後、「状態が悪いので、迷惑でなければ、明日補修しても良い。できれば直し方を整備担当者に教えたい」と進言。了解を得たので、2日目は「レースは遠慮し」キャンバスを直すことにした。夕方、バンコク市内に、キャンバス張替の資材を買いに出る。大体は日系デパートで簡単に見つかったが、肝心のビニルシートがなかった。しかし商店街を歩いて、布地屋さんでロールを発見！45パーツ/mで5mほど購入(1パーツ≒約5円)。

2日目、会場にいく。と、なんとまたレース(予選)に組み込まれているではないか！OKか？と言われすぐOK。着るものがなく、ど派手なロウ・パンを借りる。艇は、Nさんからの乗り換えで、左舷のオールロックが回らなかったと教えてもらい調整して乗るが、ストレッチャーも緩み不安定。しかしまあいいか、とスタートへ(マイペンライ)。ゴール直前でシンガポールが切り込み減速し、そこを抜きなんとか逃げ切り僅差で2位。しかし日程上、翌日の決勝には出られず敗者復活戦は棄権。それで、敗者復活はなくなり、直接決勝となった。

レース後、一番状態の悪い艇のキャンバスを修理する。整備担当の人と選手たちが手伝ってくれた。彼らに修理方法と艇を大切に扱うことの大切さを伝えるように心がけたが、とても熱心に作業に参加してくれ、うまく習得してくれた。



会場には、屋台船がそばを売りに来た。タイの屋台の食べ物は(当たり外れも時にはあるが)、とてもおいしい。特に「おかそば」よりも「ふなそば」は格段においしい。

## 4 帰国

## Back to Japan

あつと言う間の4日間だった。12月15日早朝、ホテルを後に空港へ。タイのボートは産声をあげたばかりだった。勇壮だがちょっと粗っぽい雰囲気ドラゴンボートと、細身の欧州産ローイングは全く別物にも見えるが、そうではない。きつくて漕ぐあふ雰囲気は、ローイングの精神と変わらない。ローイングが大きく育つ可能性を確信しながら、タイを後にした。

ちなみにこの旅は、一応新婚旅行「代わり」だったが、体調を崩した「つれあい」には、散々な海外旅行だったようだ。深謝。

ラマ9世橋: N13° 40' 51" / E100° 30' 58"